

富田久三郎翁とドイツ兵俘虜

— 板東収容所時代の純ドイツ式牧舎について —

富田 実

まえがき

ドイツ兵俘虜の設計により板東収容所の近くに建設された純ドイツ式牧舎は俘虜達から収容所酪農所と呼ばれていたらしい。当時のこの牧舎の正式名は「富田畜産部牧舎」であったが、現在、「船本家牧舎」として近代化産業遺産に登録されている¹。本文では、この牧舎のことを主に通称名である「ドイツ牧舎」と記述した。

収容所新聞ディ・バラッケに「ある御用商人が五千円の資金を提供して牧舎を建設したので以後衛生的な牛乳を確保できた」との記事があり、また、同新聞の板東健康保険組合 1917 年年次報告には「支出の三分の一以上は牛乳代であった。十月半ばまで北海道のフランス系トラピストから牛乳の全てを取り寄せねばならなかった。近辺からの牛乳が患者に不適当と判定されたからだった。搾乳が本職であった戦友のクラウスニツターの監督する収容所酪農所が開設されてから牛乳代は大いに減少した」とある。

この記事に“ある御用商人”とされている人物は富田久三郎翁のことである。当時 66 歳の久三郎は、板東から数里離れた水道沿いの塩田地帯で、製菓工場を経営する声望家であった。

板東収容所の開設に際し、久三郎は収容所と県の要請を受けて俘虜活用の畜産事業の開始を決断したようである。収容所管理側としては、千人を超える俘虜の必須食料である牛乳と豚肉が安定的に供給されることを期待しただろうし、また、県当局はこの機会に俘虜から先進地の酪農技術の指導を受けたいとの思惑があったようである。このような背景のもとに、ドイツ牧舎の建設と運営は、収容所の特別の計らいと協力のもとに、俘虜活用のモデルケースとして展開されたのである。

最近、松尾展成氏は日独文化交流史の観点からドイツ牧舎に雇用されていたクラウスニツターについて調査し、クラウスニツターの遺品の中から、板東富田酪農場の日本人関係者から感謝の意をこめて銀盃が贈呈されていたこと

1 当時、「酪農」と言う用語よりも「畜産」という用語の方が一般的に広く使用されていたと言う。板東町松の神社に現存する鳥居には「富田畜産部」とある。ドイツ牧舎は 1954 年に船本家所有になり、船本家の尽力によって現在まで維持されている。

を示す文書を見出している。この銀杯を贈呈したのは久三郎であり、「彼はドイツ牧舎の事業主として威を張るのではなく、ドイツ人の気風と高い知識や技能を評価していたので、ドイツ兵を遇するに最高の礼をもって慰労した」と伝えられている。

ここでは、ドイツ牧舎関連の当時の写真を詳細に分析することにより、従来の俘虜研究の見解に修正を加えつつ、久三郎の人物像とドイツ兵との交流の実態に迫ってみたい。なお、本文末に参照写真 13 画を分類記号で示し、それぞれの撮影時期、撮影場所、被写人物、出所および転載文献などを明示した。

遠州気質“やらまいか”

富田久三郎は 1852 年に遠州長上郡市野村（現、浜松市東区市野町）で生まれた。生家は姫海道の要衝で代々鋳屋（かざりや）を営み、祖父保五郎は火術家（火薬に精通した技術者に対する江戸時代の呼称）として近隣で有名であった。久三郎はこの祖父の薫陶を受けて青年期より舎密（化学）を学び、25 歳の時に当時高価な薬品であった炭酸マグネシウムを苦汁から製造する方法を確立し、地元市野や浜名湖周辺で製薬業を拡大していった。

久三郎は、青年期から壮年期にかけて、郷里遠州の二人の偉人、金原明善と松島吉平、の思想や行動に大いに感化されている。後年、久三郎がドイツ兵俘虜から技術を学び“工農一体化”を推進しようとしたのは、この二人の先輩の影響によるところが大きい。

金原明善は大庄屋に生まれ明治維新時に天竜川治水に貢献した大事業家であり、北海道で牧場経営も試みている。松島吉平は二宮尊徳の報徳を研鑽し、西遠農学社（後、三遠農学社）を設立するなど政治や社会事業におおきな功績を残し、かつ、俳諧にも精通し全国的に有名な俳人（俳号・十湖）でもあった。

やがて、久三郎はさらなる事業拡大のために苦汁の大量供給地に進出すべきと考えるようになり、瀬戸内十州塩田の中から適地として撫養塩田を選び、遠州から阿波への移転を決意した。1892 年久三郎 40 歳の時に、風光明媚な小鳴門海峡沿いの板野郡瀬戸村明神に富田製薬工場を開設した。

その後数年のうちに富田製薬はその製品の品質の良さが評判となり急成長し、また、久三郎は「苦汁利用工業の発展は我国の経済興隆につながり国益に役立つものである」と製造現場を進んで公開したので、富田製薬に続いて瀬戸内塩田各地で苦汁利用が活発化した。中でも、地元の撫養塩田では久三郎の影響を受けて創業者が続出し、当地（現、鳴門市）は明治末期には「製薬の町」の観を呈するようになった。

大正時代になると、ゴム工業の勃興による炭酸マグネシウムの需要拡大や、第一次世界大戦の勃発による臭素薬品の輸入停止などが追い風となって、富田製菓は年商百万円を超える企業に成長し、久三郎は地元で「遠州様」と崇められる存在になっていた。

ドイツ牧舎設立の背景

1917年4月に四国の3収容所（松山、丸亀、徳島）に収容されていた青島戦ドイツ兵俘虜約千人が板野郡板東町に新設された収容所に集結された。日本陸軍は、欧州での大戦の長期化を見越して、国際法に則った俘虜の処遇が可能な施設を急遽板東町字檜の陸軍用地に新設した。この建設は“あ号計画”として完成まで地元住民には目的を明かさず秘密裏に進められた。新収容所は二重の鉄条網で厳重に囲まれ、徳島連隊派遣の衛兵が所内を警備し、門外には警備警察官が常駐し、俘虜と地元住民との接触は厳しく制限されていたらしい。後に人道主義が讃えられるようになった板東収容所といえども、特に停戦条約が締結されるまで約一年半の間は、俘虜に対する収容所の監視体制は非常に厳しかったものと思われる。

日本陸軍情報局は1916年4月に俘虜の特技を調査し、特殊技能を有する俘虜を本邦工業に使用する施策を推進した。1917年の収容所再編成の際にも俘虜の職業が再調査され「この度のドイツ俘虜の中には、学者技術専門家など少なからずにつき、その指導を受けんと欲する向きは、所轄の商工会議所を経て俘虜情報局に申し出られたし」と布告したが、板東近隣にはこの布告に応じることのできる工場や事業所は皆無に等しかった。

久三郎の本拠地瀬戸村明神は板東から数里離れており、俘虜が収容所から通勤できる範囲内ではなかった。明治時代の終わり頃から久三郎は工場の水源地近辺を公園風に整備して清養荘牧場を設立し、広島県の国立七塚種畜牧場から外国種牛を入手するなどして乳牛を飼育していた。久三郎は酪農事業を甥の松本清一に任せるべく、数年前に彼を東京麻布の獣医学校に遊学させた。松本は獣医学校卒業後陸軍獣医として入隊するが1917年初に瀬戸村の久三郎のもとに帰参した。この松本青年がドイツ牧舎の運営責任者となる人物である。

少し時を進めるが、ドイツ牧舎完成後に松本は獣医学校時代の友人で徳島県海部郡出身の船本宇太郎を招き入れ富田畜産部に雇用した。ドイツ牧舎の後の所有者となった船本が昭和三十年代に収容所時代のドイツ牧舎を回想して小冊子を残している。この小冊子には、船本回想文の他に、板東収容所閉鎖後しばらくしてまとめられたと思われる松本の講演文も転載されている。両人ともド

イツ牧舎で俘虜と寝食を共にするなど密接に接触した経験の持ち主だけに、その内容は臨場感に溢れる興味あるものである。ただし、大正年間に執筆された松本講演文と板東収容所の美談が花咲いたおおよそ 50 年後に書かれた船本回想文とでは執筆の動機やスタンスに大きな違いが認められる。船本回想文は、著者自身がその内容に思い違いや誤りがあるかもしれないと断り書きしているように、俘虜との友好交流を強調することに重点が置かれているようである。ともあれ、船本によるこの小冊子は、ドイツ牧舎を研究する上で、数少ない貴重な資料の一つと位置づけられている。

船本回想文によると、「大正五年に県に産業諮問会というものがあり～（中略）。徳島県畜産技師西田牧王、板野郡長国友徳芳、俘虜収容所長松江豊寿の各氏、又出資者側から富田鷹吉・松本清一の両氏が加わって話がまとまった」とある²。このことから新牧舎設立の協議が 1916 年に行われたとされてきた。しかし、協議メンバーの一員である松本が兵役を終えて久三郎の元に帰参したのが 1917 年初であるので、上述のドイツ牧舎の設立を決定づけた協議は、板東収容所が開設された 1917 年 4 月以降に行われたとするのが妥当であろう。

また、松本講演文の冒頭に「私は大正六年一月から同九年一月迄約三ヶ年間、板東収容所に収容されたドイツ人に接しておりました」とあるが、正確には大正六年（1917）四月からとすべきところ、約三ヶ年にこだわった故の誤記と思われる。板東収容所開設準備段階すなわち徳島収容所時代に富田側に対する県当局からの打診や要請があったかもしれないが、松本がドイツ兵俘虜と接することができたのは板東収容所以外に想定し難い。

牧舎の設計から完成まで

ドイツ牧舎は板東収容所の正門から至近の場所に建てられた。一階の牛舎は厚さ約 30cm 高さ 3 m の赤煉瓦造りで二階の乾草備蓄場は木造白壁塗りの瀟洒な建造物であった。この牧舎は建築を専門とするドイツ兵によって設計された。

この設計者の名前は今までシュライダーあるいはシュレーダーとも言われ、最近には徳島収容所のヴァルター・シュライバーであるとの説も出された。

しかし、1924 年に編纂された板野郡誌には「シュラダー」の設計によると明記されている。

2 富田畜産部の代表は、久三郎の他に、富田鷹吉（久三郎の一人息子）あるいは松本清一（久三郎の甥）とされることもある。ドイツ牧舎の建設費や運営費は富田製菓の負担によるが、本文では多くの場合、久三郎と富田製菓を同一化して記述した。

以下に、同郡誌から一部の旧漢字を当用漢字に変えて引用する。

[～俘虜收容所設置以来其影響を受けて起りし事業は一にしてならずと雖も著しきは牛豚業に農事改良な（ママ）牛豚の方面に於ては大正六年四月檜に静養舎は初め留島秀一経営者となりて四頭の乳牛より毎日一斗の乳を搾りつつありしが大正六年七月獨乙式に改め牧場も獨乙人「シュラダー」の設計によりて新築し通譯には「ストーレイ」搾乳牛にはクラウスニチュルの如き孰れも獨乙人を用ひ乳牛も四倍に増し十六頭とし毎日乳量五斗を出すに至れり加之「クラウスニチュル」を技術者として「クリム」「バタ」牛乳豆腐を製造し收容所に納むることとし舎名も牛豚舎と改め瀬戸村明神の人富田久三郎代りて兼業主となり三十頭乃至六十頭の豚を扱ひ亦收容所の需に応じつつあるなり

佐山養豚場は名東郡新居村高崎なる佐山正次の設計成り豚数十頭乃至三十頭を扱いつつあり

産業舎は萩原の黒田徳太郎と三俣の乾由太郎が合資成りたる経営にして始終三十頭乃至七十頭の豚を要すは皆收容所の需要を充たすを以て目的とす～]

ここに記載されている3名のドイツ兵俘虜のうち、ストーレイはオルデンブルグ出身のシュトレー（Otto Stolle）伍長であり、クラウスニチュルはドレスデン出身のクラウスニツァー（Franz Clausnitzer）上等歩兵である。

一方、板東にはハインリッヒとオットーの二人のシュラダーが收容されていたが、それぞれの経歴から判断すると、板野郡誌に記載のシュラダーは松山收容所から移されてきたハインリッヒ・シュラダー（Heinrich Schrader）上等工兵であると結論した。俘虜群像によれば、ハインリッヒはノイミュンスター出身で、応召前に四川鉄道漢口支店に勤務していた。1918年3月に板東公会堂で開催された俘虜製作品展覧会に細密画「橋」と「管理棟」および水彩画「カルヴァンデル鉄道」を出品し、同年8月には收容所の板東健康保険組合の工兵中隊代表理事に選ばれている。このことから、ハインリッヒ・シュラダーは設計監理するに十分な能力の持ち主であったと推察できる。シュラダーが板東に落ち着くのは1917年4月中頃なので、牧舎の設計作業が開始されたのは、早くても、同年4月下旬以降と考えるのが妥当である。これによって、ドイツ牧舎の完成時期や稼動開始時期についても通説を再考察する必要性が生じている。

“富田製薬百年のあゆみ”には「ドイツ牧舎は地元大工や応援の捕虜ら30人が5ヶ月かけて8月に第一期工事を完成させ翌年東側に増築した」とあり、一期工事で完成した牧舎の写真Dも載せられている。この記述に従えば、ドイツ牧舎の着工時期は1917年4月初めになり、設計は板東收容所開設以前に行われたことになる。しかしながら、ドイツ牧舎関連写真を詳細に分析した結果、

この8月完成説は訂正されねばならない。

まず、写真Aには建設途上の牧舎一階のレンガ壁を背にして3名のドイツ兵（左クラウスニツァー、右シュトレー）が並んで立っている。状況からみて中央のドイツ兵は設計者シュラダーに間違いのないと思われる。本写真は二階木造部の棟上直後に撮られたと推定され、この3名のドイツ兵が牧舎建築現場で常時作業指導をしていた様子が偲ばれる。その撮影時期は、被写人物の服装や草木の様子から判断すると、晩夏から初秋と推定され、この時期から完成に至るまでにはまだ相当の月日を要したと考えられる。

次に、写真Bには牧舎のレンガ壁を背にして15名のドイツ兵と5名の日本人がやや改まった服装で二列に並んでいる。その服装から見るとこの写真はかなり寒い時期に撮影されたものである。前列の肘掛け椅子に座っている日本軍人が高木繁大尉であり、その左隣にシュトレー、さらに左にクラウスニツァー、そして高木大尉の右隣に松本清一が確認できる。他の被写人物の名前は特定できていないが、松本の右のドイツ兵をシュラダーと推定している。ここに写ったドイツ兵15名と日本人5名は何らの形でドイツ牧舎の建設に関与した人々であり、それは牧舎の完成を記念して、1917年から1918年の冬季に撮影されたものであろう。高木大尉の他にドイツ兵将校らしい人物も写っており、ドイツ牧舎が収容所の全面的協力体制で建設されたことを如実に物語っている。

写真Cはクラウスニツァーとシュトレーが富田製薬工場に出向き久三郎を表敬訪問した時の記念写真であり、撮影日は1918年1月22日と特定されている。写真Bと写真Cに写るこの二人のドイツ兵の服装や口ひげの状態はほとんど同じであることから、両写真の撮影時期は近接していると判断できる。さらに、ドイツ牧舎用地の久三郎への第一次所有者移転登記が1917年12月26日に成されている。新牧舎の完成を待って土地と建物を同時に登記した公算が大である。以上のことから、ドイツ牧舎の完成時期は1917年8月ではなくて同年末の初冬に訂正すべきと考える。

なお、“8月に完成した牧舎”と紹介されている前述の写真Dにはすでに乳牛の姿も認められ、ドイツ兵3名（写真Aと同じメンバー）と日本人12名が整列して写っている。椅子に座った二人のドイツ兵の間に松本が確認され、中央に立つドイツ兵（クラウスニツァー）の左の和服姿の人物が久留島秀一かもしれない。写真Dは一期工事完成後の牧舎に相違ないが、その撮影時期は、人

編集部注 写真は原文に添えられていなかったが、読者の便宜を計るため、ドイツ館所蔵のものと別途著者よりいただいたものを加え、当論文末尾に印刷しておいた。

物の服装から判断すると、盛夏ではなくやや寒い時期のようである。この写真に写る牧舎東側の外壁（二期工事で増築部と連結される）が完全な状態に仕上げられていることから判断すると、当初から一期と二期に分けて建設する計画は無かったようである。写真Dは1918年の二期工事で着工前に撮影された可能性も残されている。

板野郡誌にある「留島」は久留島の誤記であるが、久留島秀一は収容所の需要を見越していち早く板東町檜で四頭の乳牛を飼育し、牛乳生産を開始している。彼は板東進出以前から搾乳業に携わっていた人物と思われ、富田畜産部の設立に協力し、ドイツ牧舎完成に至る初期段階で同畜産部の責任者の松本清一と共同歩調をとっていたようである。

クラウスニツァーの酪農指導

ドイツ牧舎で酪農指導したフランツ・クラウスニツァーの生涯は松尾氏によって調査されている。それによれば、彼は1892年ザクセン・ブラバント生まれの酪農担当技術者の道を歩む青年であった。彼は1917年4月に丸亀収容所から板東に移されてきたが、丸亀時代に酪農技術を指導した形跡は認められていない。上載の板野郡誌に「1917年の7月にドイツ式に改めた」とあり、クラウスニツァーの所持していた証明書にも「同年7月の富田酪農場（富田畜産部）の創業以来から雇用されていた」とある。クラウスニツァーによる酪農技術指導はこの7月から開始されたのであろう。彼の当初の主たる仕事は牧舎建設の現場指導であったと思われるが、これに並行して、静養舎で飼育管理や搾乳の指導を始めたのではなかろうか。新牧舎でクラウスニツァーによる本格的な酪農指導が始まるのは1918年の年初からのことであろう。

富田畜産部と久留島の経営する静養舎との関係は不明なことが多い。「大正6年4月から富田畜産部の南側隣接地で、板東町の久留島秀一氏が乳牛4頭を飼育していたが、これも久三郎がテコ入れし、静養舎牛乳として営業を続けた」とされている（富田製薬百年のあゆみ）。新牧舎での酪農開始に至るまでには乳牛の確保や干草の調達など様々な準備が必要であったに違いない。富田畜産部が新牧舎の完成前に入手した乳牛は静養舎で飼育され、松本は久留島と共にクラウスニツァーの指導を受けていたものと推察される。

クラウスニツァーは1917年7月から帰還の間近までの2年余りの間富田畜産部に雇用されていたが、俘虜管理規律が緩和される1918年10月の停戦条約締結時までの間、収容所本部はクラウスニツァーの富田畜産部での勤務を特別扱いしていたようである。前述の松本講演文にクラウスニツァーの熱

心な勤務ぶりや乳牛に対する真摯な態度がよく描写されている。クラウスニッツァーは、ドイツ牧舎を舞台として、牛豚の飼育や搾乳、後にはクリーム、バター、牛乳豆腐（促成チーズ）製造などの先進酪農技術を松本、久留島、船本らの日本人に伝授したのである。

ドイツ兵の燻肉製造技術指導

ドイツ牧舎ではクラウスニッツァーの指導によってヨークシャー種の豚も飼育された。これらの豚は俘虜によって生肉に処理され、収容所内の加工場でハム、ベーコン、ソーセージなどの肉製品にも加工された。

板東収容所の警備警察官報告書（1918年12月7日付け）に、「ドイツ牧舎の一部を区画して燻煙室を設けて燻肉製造の準備がなされていること、これは営利目的ではなく技術ある俘虜の指導を受けて燻肉燻腿の製造技術の修得が目的であること、さきに農商務省の飯田吉英技師がドイツ牧舎を視察してドイツ兵から技術の修得を奨励したこと」などの趣旨の記録がある。この飯田技師とは習志野収容所のヤーン上等水兵からソーセージ製法の教科書を譲り受けた人物である。同報告書の別欄に「1918年9月27日に富田牛乳搾取場の視察に千葉畜産試験場の技師が来所予定であったが、延期され実際の来所日は10月25－26日であった」との記録も認められる。

クラウスニッツァー以外のドイツ兵がドイツ牧舎に頻繁に出入りするようになるのは1918年10月の停戦条約締結以降であろう。上述の記録からすると、ドイツ兵による燻肉製造技術指導が本格化するのは1919年になってからのことと思われる。ハンナスキーとビードレが解体を担当したと伝承され、また、燻肉製造はブロツホベルガーによって指導されたい。このうち、ハンナスキー（Otto Hannasky）二等砲兵はゲーベン（現ポーランド）で肉屋を営んでいたこと、ブロツホベルガー（Max Blochberger）二等歩兵（テューリンゲン・ゴロンドルフ出身）は肉屋で修業していたことが分かっている。しかし、ビードレと呼ばれた俘虜はいまだ特定されていない。

1919年3月に撮影された写真Eには当時ドイツ牧舎で従事していた5名のドイツ兵が写っている³。ドイツ牧舎のレンガ壁を背景にして、中列椅子座の3人の日本人、右に久三郎、中に松島十湖（左は十湖の付き人）と少年（久三郎の

3 写真Eの原画のうちの一枚が浜松市の松島十湖の曾孫松島知次氏宅に保存されている。俳聖松島十湖記念会資料によれば、十湖は1919年3月に阿波の富田凌霜（久三郎の俳号）の案内で阿波神社、大麻比古神社および霊山寺を参拝している。同じ日に、ドイツ牧舎を訪れた際の記念撮影が写真E、写真Fである

孫三夫) がいて、後列に 5 名のドイツ兵が立っている。後列中央のドイツ兵がクラウスニツァーであり、その左の白服のドイツ兵がブロッホベルガー、さらにその左がハンナスキーと推定されている。残る 4 人の日本人は人力車の車夫である。写真 F にはこの時の 4 台の人力車と増築後のドイツ牧舎の姿が写されている⁴。写真 E の後列左から 3 人目の白服ドイツ兵は、写真 H にもクラウスニツァーおよび船本と一緒に写っているので、船本回想文と照らし合わせて、ブロッホベルガーに相違ない。写真 E の 5 名のドイツ兵はその頃ドイツ牧舎に日常的に従事していた俘虜らしい。

ドイツ兵との送別写真

板東収容所時代のドイツ兵と地元住民の友好を象徴するような 2 枚の集合写真(写真 J と写真 K) が残されている。両写真には同じメンバーの 8 人のドイツ兵がおり、そのうちの一人が幼女を抱いている。一枚はドイツ牧舎のレンガ壁を背景に、もう一枚は屋内で撮影されている。被写人物とその服装が同じあることから、この二枚の写真の撮影日は同一と断定できる。幼女は久三郎孫・登喜子(当時 5 歳)であり、抱いているのはクラウスニツァーである。クラウスニツァー以外にシュラダーおよびハンナスキーと推定した人物も写っているが、ブロッホベルガーの姿は認められない。残る 5 名のドイツ兵は写真 B、写真 E および写真 G のいずれかに重複して写っている。

富田側として幼女の他に久三郎、少年(久三郎孫・三夫) および松本が写っている。人物の服装は冬季のものである。幼女登喜子の姿や表情には写真 C(1918 年 1 月 22 日撮影) に比べて相当な成長の跡が認められ、同様に、少年光夫にも写真 E(1919 年 3 月) から変化が認められる。以上を勘案すると、写真 J と写真 K の撮影時期は 1919 年末冬季以外に想定できない。この二枚の写真は、俘虜全面解放の日取りが公表された後に、久三郎が二人の孫を連れてクラウスニツァーらの送別のためドイツ牧舎に出向いた時に送別記念に撮影されたと断定できる。

数年前に著者の叔母に当たる大村登喜子(写真 J と写真 K の幼女) にこの時の思い出を問い合わせたところ、「他のことは何も記憶にないが、ただ、大勢の外人が集まって鍋で豚を煮ていた光景だけを覚えている」とのことであった。

4 写真 F から、遅くともこの時(1919 年 3 月)までにドイツ牧舎の増築は完了していたことが確認できる。従って、二期工事は燻肉製造開始に備えて前年(1918 年)後半に着手されたと推定できる。

ドイツ牧舎に集まったドイツ兵によってこの時送別の宴が開かれていたのであろうか、幼女を優しく抱いたクラウスニツァーにやすらぎと安堵の表情が感じ取られる。

この送別写真は初期の鳴門市ドイツ館に展示されていたし、林啓介氏の著書には「富田さん一家と捕虜たち」と紹介されている。さらに、NHKのテレビドラマ「なっちゃんの写真館」にも主人公の幼女時代を連想させるほほえましい映像として使用されたこともある。

板東収容所の俘虜が解放され祖国へ帰還してから7年余り後の1927年、75歳の久三郎は徳島出身の薬学博士長井長義の案内でドイツの薬化学工業を視察した。凡そ10ヶ月間のドイツ滞在中に、彼はとある農場にクラウスニツァーを訪ねて旧交を温めている。松尾氏の調査によれば、当時クラウスニツァーは騎士農場タンネベルクに上級酪農担当者として勤務していた。この時、久三郎は長井博士の門下生である上野周女史（通訳）と二人でザクセン州タンネベルクを訪れたらしい。

コップ大尉との交流

1918年8月に久留米収容所より板東へ移ってきたコップ海軍大尉（Wilhelm Kopp）はとりわけエピソードの多い俘虜である。すなわち、ドイツ皇帝から賜ったとする愛犬2匹を青島から日本に連れて来たこと、夫人ヘレーネが面会のため頻繁に収容所を訪ねたこと、夫人との同棲許可を収容所に願いつたこと、などである。また、松江所長の長女は後年の思い出として「コップ大尉から2匹のダックスフンドのうち1匹を兄がもらい、その犬をコップと名付けた」と語っているように、松江所長とコップは懇意な仲であったようだ。

コップがドイツ牧舎に関係した形跡は認められていないが、コップと久三郎との交流を示唆する以下の事例がある。

久三郎はドイツ兵が収容所の裏山に建てた別荘小屋2棟を自宅近くの小山に移して記念館とした。この洋風小屋の一棟は「コップ」と呼ばれ1940年代まで保存されていた（写真L）。コップ小屋は松江所長の仲介でコップから譲渡された可能性が大きい。

最近、富田本家の蔵から妙齢の西洋女性の全身像を撮った古い写真Mを発見した。私用葉書として作成したもので、写真の裏面は宛名欄の罫線がひかれている。ただし、この写真は、葉書として郵送されたのではなく、手紙に同封されたものか、あるいは、直接手渡されたものと考えられる。なぜならば、こ

の写真葉書に送り先の住所や氏名の記載はなく、「Meine liebe Frau」および「Pfungsten 1922」とサインされているからである。松尾氏がドイツのシュミット氏に問い合わせた結果、この写真葉書のサインの筆跡はコップによるものと判断され、写真Mの女性はコップ夫人ヘレーネと推定された。

「雑書編冊」の記録からヘレーネ夫人の動向を追ってみる。彼女は、1917年9月8日に、久留米収容所にいたコップの意を受けて、板東収容所に収容されていたドイツ兵将校を慰問している。コップは1918年8月7日に板東収容所に入所した。この間、ヘレーネ夫人も久留米を離れ友人を頼って一時的に横浜に滞在しているが、9月には徳島市に転住したらしい。1918年9月27日から「雑書編冊」の記録が残る同年末の3ヶ月の間に、ヘレーネ夫人は計11回板東収容所でコップと面会している。当初は2週間に1回30分の面会が許可されていたが、10月末から1週間に1回1時間に緩和されている。これまで、ヘレーネ夫人は徳島に在住していなかったとされてきたが、1919年末の俘虜解放時まで徳島にいたに違いない。

写真Mは1922年の聖霊降臨祭の折りに封書に入れて送られたものか、あるいは、1927年の久三郎のドイツ滞在中にコップから直接貰ったかのどちらかであろう。久三郎がドイツでコップと会ったかどうかは不明である。しかし、当時コップは海軍大佐として本国にいたので、両者の再会の可能性は大いにある。久三郎は帰国後に、「ドイツの知人が特別に用意してくれたご飯の缶詰がとても美味しかった」と回想していたと伝えられている。米麦中心の食生活の改善を唱えて酪農を実践した久三郎にしてみても、長い異国滞在中にさすがに米食が恋しくなったのであろう。この時、ご飯の缶詰で久三郎をもてなしてくれたドイツ人は知日家のコップ夫妻であったかもしれない。

終わりに、ドイツ兵が板東を去ってからまだ間もない頃の、当時の撫養の社会状況や久三郎の率いる富田製菓の活況とコップ小屋の存在を伝える新聞記事を引用する。

徳島日日新報「因襲の殻を出て撫養婦人団の富田工場見学」、大正十一年（1922年）6月15日記事

「捉はれた因襲の重味に圧されたような空気の中に、只管賢妻良母を唯一の玉条として未だ足一步戸外に出たことのない撫養婦人が、始めて社会見学といふ名目の下に、瀬戸村富田工場を視察するといふ。実益の如何は扱っておき年久しく被り来った堅い殻から抜け出しての団体外出は、少なくとも在来の撫養婦人に取っては破天荒の企て、この自由の首途、ソレ自身にすくなからざる興味が

ある。十二日、午前八時、中島、福井の両幹事が先発した後を追って二台の自動車は、撫養愛国婦人会幹事長武井里子女史外三十余名の婦人団を乗せ、砂塵を後に黒崎街道を驀進した。丸山入口のとある寺院で勢揃ひし、麗しいパラソルに軽暑を避けながら畦道を縫ふて牧場に向かふ。主人鷹吉は留守で案内役は富田久三郎翁外主任技師等兩三名、丸々と肥え太った乳牛の放牧状態から搾乳瓶詰め販売に出る諸作業、さては後方小山一帯の柑橘園、ドイツ俘虜製作の記念館⁵、針金張りの葡萄棚等、全面積六町歩余の園内のここかしこを逍遙し、いよいよ工場へ入る。苦汁から副産塩採取、炭酸マグネシアの製出に至る迄の経路、粉末として袋に詰めて商品は工業用医薬用として用途頗る広汎な事などを、仔細に見聞して二時半職工娯楽室にて昼食をとり、午後は富田氏所有船久友丸に塔じ⁶、快速力で油の如き撫養の瀬戸を北泊へ走る。幽すうなる阿波井神社やたんたんとして声なき例の阿波の赤壁を見て、小鳴門口より引き返した。顧みると年産百五十万円の富田工場の四基の煙突から濛濛と吐き出す黒煙は、宛然阿波薬業界に雄大の気を吐くが如く、建ち並ぶ十数戸は悉く水入らずの遠州系数百名の職工と共に堂々富田王国を形成している。五時、岡崎潮湯に汗を流し、気も心もすがすがと各自家路に就いた。」

ドイツ人伝授の酪農産業を継続させんとした久三郎は1937年の大晦日に天寿を全うし、後継者富田鷹吉も後を追うように一年後に死去した。その後、良き理解者を無くした富田畜産部の活動は社会状況の急変も相まって自然消滅の道を歩むこととなる。

参照写真一覧

本文に参照した13画の写真を撮影時期の早いと思われる順にアルファベット(A～M)記号を付けその説明一覧を以下に示す。

5 ドイツ俘虜製作の記念館とは板東収容所から移築された瀬戸村明神の清養荘牧場の裏山の頂と中腹にあった二棟の別荘小屋を指していると思われる。また、久三郎は作品展で売れ残った俘虜製作品を多数買い上げたと言えられ、これらの品々が記念館に展示されていたのであろう。

6 富田製薬所有の船は全て「久友丸」と名付けられた。これは富田久三郎の「久」と藤沢友吉の「友」を合わせた命名である。藤沢友吉は大阪道修町の藤沢商店の創業者で、久三郎と盟友関係にあり富田製品を一手に販売した。昭和初期に、ドイツ兵から伝授された富田畜産部製バター「シルクハットバター」も久友丸で大阪に出荷され、藤沢商店を通して販売された。

写真A：建設途上のドイツ牧舎（二階木造部の棟上直後）、ドイツ兵3名（クラウスニツァー、シュトレー、シュラダー）と日本人10名、1917年晩夏～初秋に撮影（推定）、「第九の里」ドイツ村146頁に掲載。

写真B：ドイツ牧舎完成記念、ドイツ兵15名と日本人5名（うちクラウスニツァー、シュトレー、シュラダー、高木大尉、松本清一を判別）、1917年末～1918年正月の初冬に撮影（推定）、徳島新聞2006年10月10日に掲載。

写真C：クラウスニツァーとシュトレーの富田製薬工場訪問記念、ドイツ兵2名と日本人11名（富田久三郎と孫、介一、弘、昌平、登喜子および社員の松本清一、松島久太郎、金子幸吉、小池三十郎、上原益平、山内政太郎）、1918年1月22日撮影。

写真D：一期工事完成後のドイツ牧舎、ドイツ兵3名（クラウスニツァー、シュトレー、シュラダー）と日本人13名（ドイツ兵の間に松本清一が立っている）、1917年後半～1918年後半のやや寒い時期に撮影（推定）、「富田製薬百年のあゆみ」89頁に掲載。

写真E：久三郎が俳聖松島十湖をドイツ牧舎に案内した時の記念、ドイツ兵5名（うちクラウスニツァー、ブロッホベルガー、ハンナスキーを判別）と日本人8名（富田久三郎と孫三夫、松島十湖と同伴者、人力車の車夫4名）、1919年年3月に撮影、「富田製薬百年のあゆみ」24頁に掲載。

写真F：増築後のドイツ牧舎を背景とした4台の人力車、写真Eと同じ日本人8名が写っている、1919年3月、写真Eと同じ日に撮影。

写真G：富田鷹吉を囲んだドイツ兵、富田久三郎の息子の鷹吉がドイツ牧舎に出向いた時にドイツ兵が参集、ドイツ兵6名（クラウスニツァー、ブロッホベルガー、シュラダーを判別）と日本人5名（富田鷹吉の他はドイツ牧舎に従事していた人のようであり、ドイツ牧舎隣接の宿舎で賄いをしていたと推定される若い女性が前列中央に座っている）、1919年前半撮影（推定）。

写真H：船本宇太郎と二人のドイツ兵、向かって右クラウスニツァーと左ブロッホベルガー、ドイツ牧舎のレンガ壁を背景、1919年前半撮影（推定）、「第九の里」ドイツ村147頁に掲載。

写真I：松本清一とクラウスニツァー、ドイツ牧舎隣接の宿舎を背景、1919年夏季撮影（推定）。

写真J：送別写真1、ドイツ牧舎のレンガ壁を背景にドイツ兵8名（前列右端で幼女を抱いているのがクラウスニツァー、その左シュラダー、中列左から二人目ハンナスキー）と日本人8名（富田久三郎とその孫三夫と登喜子、松本清一、後列左に船本宇太郎）、1919年末の俘虜解放前に撮影（推定）。

写真 K：送別写真 2、ドイツ兵 8 名日本人 7 名（船本宇太郎が抜けている以外写真 J の同じメンバー、中央で幼女を抱いているのがクラウドニツァー）、写真 J と同じ日に屋内で撮影されている、「第九の里」ドイツ村 150 頁に掲載。

写真 L：ドイツ兵の別荘小屋、瀬戸村明神の富田製薬工場前の小山に移築された俘虜製作小屋 2 棟、山上の小屋は「チゴマン」中腹の小屋は「コップ」と呼ばれていた、撮影時期不明。

写真 M：コップ大尉夫人像（推定）、写真葉書（私の愛する妻、1922 聖霊降臨祭の署名あり）、1922 年撮影。

上記のうち写真 M を除いた 12 画像は、現在、鳴門市ドイツ館に保管されているようである。拙文がこれら写真資料の系統的分類や画像解析に役立てば幸いである。

参考図書・資料

- 1) 板東俘虜収容所日独戦争と在日ドイツ俘虜；富田弘、法政大学出版会、1991
- 2) 日本＝ザクセン文化交流史研究；松尾展成、大学教育出版、2005
- 3) 富田製薬百年のあゆみ；富田製薬株式会社、1992
- 4) 富田製薬と賀川豊彦鳴門記念館そしてドイツ人俘虜の物語；
勘川捷治郎、薬学図書館、第 43 巻、1,2,4 号、1998
- 5) ドイツ俘虜の家畜管理と酪農の草分け時代；三愛酪農部、1968
- 6) 板野郡誌第三編時代志（三）第十三章諸戦役（七）俘虜収容所；
岡崎信夫《編》、1924
- 7) 板西警察分署警備警察官出張処日誌「雑書編冊」；寺岡健二郎氏所蔵
- 8) 「板東俘虜収容所」研究、昭和 62・63 年度文部省特定研究報告書；
鳴門教育大学、1990
- 9) 「第九」の里ドイツ村―「板東俘虜収容所」改訂版；
林啓介、井上書房、1993
- 10) 青島ドイツ軍俘虜概要；瀬戸武彦、CD 版、2007
- 11) 「チンタオ・ドイツ兵俘虜研究会」ホームページ；
< <http://homepage3.nifty.com/akagaki/> >、2003（発足）



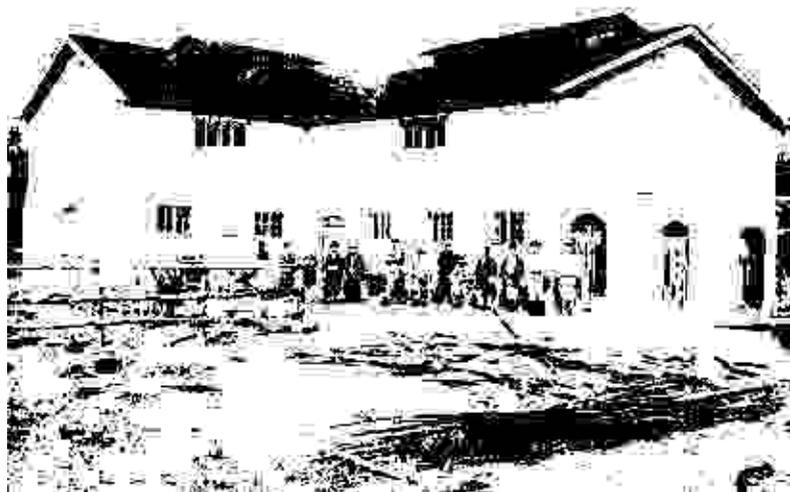
写真 A



写真 B



写真C



写真D



写真E



写真F



写真G



写真H



写真 I



写真 J



写真K



写真L



写真M

